

台湾内政をめぐる動向（2015年5月上旬～6月下旬）

国民党の総統候補党内予備選の実施、蔡英文民進党主席の訪米

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員）

（元（財）交流協会台北事務所専門調査員）

中国国民党の次期総統候補を選出する党内予備選には、有力者が出馬を回避し、伏兵の洪秀柱立法院副院長だけが出馬し、6月12-13日の世論調査で党内規定を上回る支持率を獲得し、公認候補に内定した。7月19日開催予定の全国代表大会で正式に決定する予定。蔡英文民進党主席が、5月末から6月上旬にかけて訪米し、国務省関係者、国会議員、シンクタンク関係者と公式、非公式の会談を行ったほか、各都市の華人団体の会合にも出席し、支持を訴えた。

一、次期総統選挙の国民党の党内候補の選出

国民党党内予備選の届出は、評価の高い人物がこぞって出馬を見合わせた結果、それ程評価の高くない洪秀柱立法院副院長と楊志良元衛生署長が済ませたが、関連書類の不備から、楊元署長は審査に合格せず、洪副院長一人だけが登録を完了し、電話による世論調査に進み、党内規定をクリアし、公認候補内定となった。

本節では、党内候補登録前からの動向を整理する。

1. 党内候補の予備選登録までのプロセス

5月中旬の党内予備選の登録締め切りまで、有力者の間で様々な駆け引きが展開された。5月2日には、馬総統の「意中の人物では」と指摘され続けてきた呉敦義副総統が、「自身は予備選には登録しない」と明言しながらも、「予備選ですんなり候補が決定せず、党から正式な徴召（招聘）があれば、総統選挙の出馬を考慮する」等の発言がなされた。

一方で、党内及び藍軍支持者の中で最も待望論が強かった朱立倫主席は、4月の時点でも否定的見解を説明していた。しかし、5月11日の台湾各紙は、馬総統が自ら、朱主席に対し二度も総統

選挙への出馬を促していたと報じたほか、予備選でB級候補者が低支持率に終わり、党内規定をクリアできなかった際には、勝てる候補擁立のため、朱主席か王金平立法院長を樹立する動きがある等の報道がなされた。

5月上旬の時点で、有力者の一人である王院長は自身の立法院長再選も見据えた揺さぶりも兼ねてか、同人の言動が活発化し、一時は「出馬宣言も間近か」と連日報じられたが、5月15日に「個人の努力不足で支持者の期待に応えられなかった」と支持者に謝罪をする会見を行った。しかし、総統選挙不出馬に関しては明確に表明しなかったこともあり、党内予備選には登録しないが、洪副院長の支持率が振るわず、党内から強い候補を求める招聘メカニズム発動に備えた動きではないか、真の狙いは総統選出馬をちらつかせ、立法院長の再選を勝ち取る気ではないか等様々な憶測が流れた。翌16日には、朱主席が記者会見で自身の予備選不出馬と国民党候補が総統選挙で敗北した際には、責任をとり自身は党主席を辞任する意向を強調したことで、世論の関心は予備選出馬登記を済ませた洪、楊両名の動向に移った。

その後、国民党は数日間かけて、両候補の署名資料を精査した結果、楊候補の署名資料には不備があり、洪副院長だけが審査に合格した。その後、

5月31日に公認候補は、6月12-3日に行う世論調査で決定する旨説明がなされた。本来は、資格審査合格後には候補者間の政見討論会が予定されていたが、一人だけの候補になったため、党中央常務委員会での演説に変更された。

しかし、その後も党内で「B級人物」が候補になることで自身の再選にプラスにならないことを危惧する立法委員や、議会選挙敗北必至を憂う党関係者からは、明白に洪副院長に対して辞退を迫る有形無形の圧力を与えるなどの噂が連日メディアで報じられたほか、世論調査実施直前になって、洪副院長の支持率が党内規定に届かないことを半ば期待して、王院長が「党内メカニズムにより招聘されれば出馬を拒否せず」と発言したことなどが報じられた。

一方、洪副院長も自身に対する予備選出馬辞退を迫る党内の圧力の存在を認めながらも、「絶対に屈しない」と不退転の決意を示し、世論調査実施直前の10日には、中央常務委員会で政見を公表したほか、弱点と見なされていた外交、兩岸については、元外交部長、元海基会秘書長など過去の閣僚経験メンバーから構成された「顧問団」を発表し、「対外政策も問題なくこなせる」と強くアピールしたほか、頻繁にメディアに登場し、世論へ支持を訴え続けた。

2. 国民党総統選挙党内予備選挙の結果

国民党の総統候補を選出する党内予備選は、6月12-13日の2日間、三社の世論調査機構「全国意向」、「典通」、「聯合報」を通じて実施し、14日

に李四川秘書長が結果を公表した。

世論調査は洪副院長個人の支持度を問う(A)「個人支持率」、(B)蔡英文民進党主席との対決を想定した「対比支持率」をそれぞれ50%ずつ加算した平均値で争われた。

李秘書長は、「世論調査機構3社による洪同志の平均支持率は46.203%となり、党の関連規定である30%の支持率を超えたため、党中央常務委員会での決議を経て、7月19日に開催される国民党代表大会で決議され、正式な公認候補に決定する」と報告した。

国民党の党内予備選における世論調査では、立法委員選挙の党内候補選出のプロセスでも弱い候補者が公認候補になるのを防ぐために支持率が30%を下回った場合は、仮に複数候補の争いで1位になっても公認候補には決定せず、他の「強い」候補を招聘できる規定があったが、今選挙の結果は個人支持率、対比支持率ともに約41%~53%と高支持を集めた。(表1)

李秘書長が世論調査の結果を公表後、洪副院長は党本部で記者会見を行い党内及び支持者に対して感謝の意を示すとともに、「この勝利は第一歩でしかない。世論調査の結果に耽溺せず、満足すべきでもない」として「更なる自信、意志、勇気を持って前に進まなければならない。二人の女の選挙は、台湾社会に全く新しい印象と感覚をもたらすであろう」と述べるころがあった。

調査結果を受けて、朱立倫主席と洪副院長は立法院で会談し、双方は「党中央とシンクタンクが全力で総統選挙における政見の論述に関してサ

表1 国民党の総統候補を選出する世論調査結果

		三社平均	全国意向	典通	聯合報
設問 A	洪秀柱が国民党の代表として総統選挙に出馬することを支持するか否か。(個人支持率)	50.7%	52.67%	51.35%	48.27%
設問 B	蔡英文と洪秀柱のどちらを総統に選びますか?(対比支持率)	41.6%	43.68%	40.64%	40.61%
合計	A50% + B50%	46.2%			

ポートする」、「選挙対策チームを整合させる」、「党中央が総統選挙用の選挙対策事務所を提供し、全力で選挙をサポートする」の三項目につき合意したと説明した。

台湾の主要各紙は「2016年の女性総統は誰か」、「女性の戦い」などと、次期総統選挙では有力二政党が女性候補になる態勢が内定したことで、女性総統誕生への期待感が滲み見出しが躍った。その「女性の戦い」のもう片方の主役である蔡英文主席は、イベント出席の際にメディアに対し、「洪秀柱副院長がスムーズに党公認候補に選出されれば、ともに新しい選挙文化を創造したい。過去に多く見られた、相手への罵倒、でっち上げ、レッテル貼りなどの不当な選挙活動を行わない。今回の選挙は『二人の女の戦いではない』」と示すとともに、「一緒に選挙の気風を浄化し、選挙権を含む公民権の18歳への引き下げの憲法修正を推進しよう」と呼びかけるところがあった。

藍軍系メディアでは洪副院長に対する祝福の声が増える中、国民党政権に厳しい立場で臨む『自由時報』紙は、今回の予備選のプロセスや結果につき噴出した国民党内部の複雑な党内事情を反映した見方、国民党、民進党双方の陣営から提起された世論調査の信用性などにつき紹介している。

朱立倫主席派の廖正井立法委員は、「現在の馬政権に対する世論の評価は厳しいものがある。蔡英文はすでに3年も総統選挙に向けた準備をしているところ、洪副院長は時間的にも厳しい。現内閣も選挙を見据えた選挙内閣に改組し、早急に選挙に向けて動き出す必要がある」と強調した。一方、匿名の王金平派の立法委員は、「洪副院長のイデオロギーはあまりにも統一派に偏っており、彼女の公認候補選出は中南部地域の立法委員にとっては全くプラスにならない。本土色の強い中南部の選挙は大苦戦必至である」と憂慮する声を紹介した。

また世論調査に対するルールの設定と調査結果

に対する信用性への疑義も提出された。国民党中央常務委員の李柏融は、「今回の調査結果は嘘っぽい、民進党支持者の多くが（汲みしやすい）洪副院長の選出を願って、本音ではない『洪秀柱支持』と回答していた者が相等いたはずである。また従来の党内の世論調査のルールであった対比支持度85%+個人支持度15%を、誰かが勝手に洪副院長に対して有利なように50%+50%に変更した」と不満を漏らした。

民進党陣営からは、陳其邁立法委員が、「洪副院長が個人支持率で三社とも軒並み40%を超える高支持率を獲得した。一方で『慣例に基づき』との理由で、国民党は相手候補（蔡英文）の支持率を公表しなかったが、同様の世論調査では通常、無回答者、回答拒否者が2-3割くらいは占めるはずだが、今調査における洪副院長の支持率は異常な高さであり、調査の信用性を失っている」と調査自体に疑義を呈した。

洪副院長の副総統候補の人選としては、「男性」ということでは、かなりの合意があるようだが、国民党関係者によると洪副院長と以前相談したところでは、「行政経歴が豊富で、財政と経済に明るい党内同志」、「党外に優秀な人材を求めることも反対せず、勝利を前提に思考」の二つの方向があると示唆した。洪副院長本人は、副総統候補の主要条件として「理念の一致」、男性、自分より少し若い、地域バランスを考えて中南部出身、省籍問題については注意が必要とし、自身が外省人に分類されていることを意識してか（父外省系、母本省系）本省人など、相互補完できる人材の登用を示唆した。

表2は現段階の両候補の背景、経歴、政治的主張等の比較である。現段階で政策面の主張で最も際立つ違いは、兩岸政策の立場の違いを指摘できる。蔡英文が、台湾独立を選択肢として残しながらも、公には中道路線を歩み、一貫して現状維持を主張しているのに対し、洪秀柱は自身の兩岸政

表2 洪秀柱副院長と蔡英文主席の経歴、政見比較

	洪秀柱 (国民党)	蔡英文 (民進党)
年齢、婚姻	67歳 未婚	58歳 未婚
学歴	米ミズリー州立東北大修士	英ロンドン政経学院博士
政党経歴	副主席、代理秘書長	主席
政治経歴	立法委員、立法院副院長	行政院副院長、大陸委员会主任委員、立法委員
兩岸関係	一つの中国を同時表明（一中同表）台湾独立反対、兩岸平和協定締結を推進	兩岸現状の維持 中華民国現行の憲政体制下で兩岸関係の平和的發展を推進
原発政策	エネルギー供給の安全を前提とした上での原発依存度を下げる	省エネ計画を推進、2025年に非核国家を目標
労働者の権利	労働時間短縮、最低賃金引き上げと毎年の基本給検討、派遣社員の2年内の正職員化	基本賃金法制定、立法により派遣社員の権益を管理する
死刑廃止	死刑廃止に反対	社会の一定のコンセンサス必要
性の多元性	愛するもの同士が法律の保護を受けることを支持。（同性愛へ理解）	台湾社会がこの方向に進むことを希望する。
憲法修正	18歳公民権付与 行政院長の立法院における同意人事復活	18歳公民権付与などと野党で合意ある件につき先に修正する二段階修正案を主張

資料元：「洪秀柱 VS. 蔡英文」、『聯合報』（2015年6月15日）頁3、「柱姉 VS 小英」、『自由時報』（2015年6月15日）頁4。

策に関して、明確に台湾独立を否定し、「一つの中国を同時に表明する」、政治対話を通じた兩岸平和協定の締結を掲げるなど、過去の総統候補と比べて急進的統一派の立場に近い言動が際立っている。

しかしながら、支持基盤の脆弱な洪副院長が自身の支持率を上げるために、党内の基本教義派が好む主張をし、保守層の「深藍」（急進統一派）の支持を固めてから、選挙戦が進む段階で、その主張をより現実的な中道（現実）路線に修正する手法をとることはある程度理に適っており、選挙が進む段階で適宜修正されていくものと筆者は考えている。

国民党の党内予備戦直後に発行された『新新聞』は、洪秀柱の選出をテーマに特集を組んだが、国民党内の権力闘争がからんだ内幕を多方面から論じている。

コラムニストの顧爾徳は、今選挙での最大の勝

利者は洪副院長であったとしつつ、最大の敗者は、馬総統に徹底的に妨害され、屈辱的に予備選の出馬を断念せざるを得なかった王金平であったと指摘し、74歳という年齢的にも最後の機会を逸したと論じた。また朱立倫主席も、党内予備選期間中に指導力を発揮できず、政治家に必要な「決断力に欠ける人物」というイメージが印象付けられ、王に劣らない敗者であると論じた。また馬総統に関しては、一番憎い王金平を抑え込み、朱主席の台頭を防ぐことに成功し、馬（自分）を頼りにせざるを得ない洪副院長が選出されたことは、2016年の総統退任まで自身のレームダック化を回避できる見通しがついたことで勝者になったと論じた。

他のコラムでも、朱主席が、今回の総統選挙は勝ち目がないことを悟り出馬しない一方で、王金平に負け戦をさせつつ、選挙の重点を議会選挙に絞り、立法院で国民党が過半数議席を制すること

で、馬、王、呉敦義といった旧世代の政治家を政治舞台から追い出し、自身は党主席の留任に成功し、党の救世主として次世代を担う真のリーダーとして君臨する狙いであったが、馬が王の出馬を妨害しただけでなく、コントロールの利かない洪副院長が総統候補に選出されたことで、その目算が大きく狂うことになったとの指摘もされた。

予備選勝利後の洪副院長は、自身の訪米について消極的な姿勢を示したことや朱主席や王院長に対する軽薄な発言が党中央常務委員会で槍玉に上がったほか、同女史が対外的に示している米国教育学修士学歴の詐称疑惑が指摘されるなど、国民党内はまだ一致団結して洪女史を推そうという雰囲気にはなっておらず、7月19日の全国党代表大会まで予断を許さない状況である。

3. 国民党、民進党両陣営の候補内定後の世論調査

国民党の党内予備選から、4日後に『TVBS』が公表した支持率調査の結果は、洪副院長41%、蔡英文38%と逆転する結果となった。無所属候補として出馬表明している施明德元民進党主席は2%にとどまっている。

ご祝儀相場とはいえ、予備選2ヶ月前の段階で『聯合報』が行った調査では、洪副院長は国民党内でも4番目の位置、蔡 VS 洪の対比では60%対12%と大差がついていたのが、調査機関と調査方

法が異なるとはいえ、驚くべき結果となった。

政党支持傾向でも洪、蔡両候補とも自党の支持層は8割近く固めた一方で、政党支持の弱い、中立有権者が3割以上も支持する候補を決めていないところ、今後はこれらの層の取り込みが勝負の分かれ目となるであろう。

一方で、民進党に近い機関の「兩岸政策協会」が実施した支持率調査では、蔡英文50% VS 洪秀柱29%と蔡主席が大幅リードする結果が出たのに続き、『聯合報』が6月29日に公表した世論調査の結果は、支持率で蔡英文45%、洪秀柱33%、看好度(有力度)は蔡53%、洪13%と蔡英文が大きくリードするなど、台湾住民の過半数以上が蔡英文が勝利すると見なしている結果となった。筆者の感覚としては、直後の『TVBS』の調査よりも『聯合報』調査の方が「民意」を反映した数字ではないかという感じがするのは、主観的な見方であろうか。

二、次期総統選挙第三候補の動向

国民党の候補者選びが佳境を迎えていた5月20日、施明德民進党元主席が正式に次期総統選挙への出馬を表明した。同人の主張は、国民党、民進党ともに台湾社会が真に求めているものを体現できていないとし、与野党をともに批判することを基調としつつ、現段階で優位な地位に立つ蔡主席を批判の焦点に絞り、民進党の主張は大企業、

表3 総統有力候補の支持率と支持政党傾向

	全体	支持政党の傾向			
	100%	民進党 25%	国民党 28%	中立 34%	その他 13%
洪秀柱(国)	41	9	77	34	39
蔡英文(民)	38	81	10	30	40
施明德(無)	2	0	2	2	1
未決定	20	10	11	34	20

資料元：「民調洪秀柱支持度首贏蔡英文3個百分點」、『TVBS』(2015年6月17日)

<http://news.tvbs.com.tw/politics/news-603644/>

表4 2016年総統選挙情勢の支持度と有力度

	支持度	有力度
蔡英文	45%	53%
洪秀柱	33%	13%
無意見/無回答	23%	34%

資料元：「2016 雙雌争覇 本報新民調 蔡英文 45% 贏洪秀柱 33%」『聯合報』（2015年6月29日）頁1。

富裕層に媚びていると批判するとともに、藍緑といった既存の政治的枠組みを超えた大連合政府の形成により、台湾社会の和解を促進させることが唯一の選択肢であると強調した。また两岸関係においては、「大きな一つの中国の枠組みが一つの中国原則に取って代わる」（以大一中架構取代一中原則）原則を主張したほか、内政面では、二年以内に住民投票を実施して、大統領制から内閣制への移行を主張した。

同人は、2006年に陳水扁前総統の親族のスキャンダルが発覚後、陳水扁の辞任を求める大規模な抗議活動を成功させるなど、未だに台湾社会で一定の影響力を有しており、仮に与野党の対立が選挙を控えて先鋭化、激化し、国政も更に空転した場合、昨年のみまわり運動のような、国民党でもない、民進党でもない人々の支持を集め、総統選挙でキャスティングボートを握る可能性も指摘されている。

また前回2012年の総統選挙では、国民党との協力関係が破綻し、親民党の存続を賭けて総統選挙に出馬した宋楚瑜親民党主席も同党秘書長ら周辺の関係者が、次期総統選挙出馬の可能性を匂わす発言を繰り返し行っている。一部の藍軍支持者や中間層には「洪副院長では戦えない」とし、宋氏の出馬に期待する声があるのも事実である。

台湾の関連規定では、無所属候補が総統選挙に出馬するには、有権者の1.5%の署名が必要であり、2012年の有権者数にあてはめると約27万人分の署名が必要となる。2012年の総統選挙に無所属で出馬した宋楚瑜主席は46万人以上の署名

を集めている。

三、蔡英文民進党主席の訪米

蔡英文主席率いる民進党代表団一行は5月29日から6月9日まで12日間の米国訪問を行った。米国滞在中、ワシントンではアントニー・J・ブリケンケン国務副長官と非公式会談を行うなどハイレベル交流のほか、各地で華僑団体との懇親会、シンクタンク及び大学での講演、企業視察などを行った。

台湾の総統候補は選挙の前年に訪米する機会が多い。2007年には民進党では謝長廷が、2011年にも蔡英文が訪問している。馬総統も台北市長と党主席を兼務し、総統候補になることが有力視されていた2006年に訪米している。

蔡主席の訪米の目的は、台湾系華僑への支持の訴え（彼らの多くが選挙のために一時帰国する）や政治資金集めといった内政的考慮のほか、実質上の同盟国である米国に対し、米に対する「顔見せ」を行い、自身が米にとって信頼たる人物であることを訴え、認識してもらい、緊密な米台関係の継続の強調をすることにある。特に民進党は、陳水扁政権時代に対米関係が悪化し、修復に多大な苦労を強いられた失敗を繰り返さないためにも、党是である台湾独立を放棄することはできないが、中国との間では対立を引き起こすような挑発的行為はとらず、两岸関係の平和と発展を主張したようである。

米国への出発に際し、蔡主席は桃園空港で記者会見を開き今回の訪米の目的は二つあるとして、一つ目は、「米国各界関係者との意見交換、同時に米台関係の深化を促進させる。特にアジア太平洋の安保問題、米台貿易問題に関する意見交換を希望する」。

二つ目は、「ハイテク産業、サービス業関連の企業を訪問するほか、科学技術関連のフォーラムにも出席し、新興産業、物流網などの新しい分野の

産業形態を視察し、台湾の産業が新たな契機を見つける機会としたい」と強調した。

米国滞在では、6都市を訪問し、以下の日程をこなした。

5月30日 ロサンジェルス：

台湾出身華人系下院議員との朝食会、米学者との座談会、華人団体による歓迎宴

5月31日-6月1日 シカゴ：

華人団体による晩餐会、ノーベル経済賞学者 James Heckman 表敬

6月2-5日 ワシントン DC：

民進党駐米代表処視察、メディアとの対話、シンクタンクでの講演、米国会議員による歓迎カクテルパーティー、U.S Taiwan Business Council 主催の昼食会、元国務省高官表敬、華人団体の歓迎会、メディアとの茶話会、国務副長官と非公式会談

6月5日 ニューヨーク：

華人団体による歓迎宴と講演

6月6日 ヒューストン：

華人団体による晩餐会

6月7-8日 サンフランシスコ：

企業訪問、科学技術フォーラム出席、メディアとの茶話会、華人団体での講演

6月9日 台湾帰国：

台湾メディアに対する訪米成果の説明

9日、帰国の途に着いた際、蔡主席は桃園空港で簡単な記者会見を行い訪米を総括した。蔡主席は、「今訪米の12日間、米国の行政、立法部門及び産業界、シンクタンクと幅広い分野での意見交換を行い、全ての行程の内容が豊富で多元的なものであり、また同時に米国の台湾に対する善意を感じることができた」と述べた。

次に、今回の訪米で米国に伝えた最も重要なのは、「台湾人民は民主、自由を堅持する。同時に我々は兩岸関係の安定を維持し、そのための強い決意を持っていることである」と強調した。

最後に、今回のスケジュールは概ねスムーズに展開し、当初設定していた目標を達成することができたと述べ、最後に今回の行程をアレンジした米国政府及び在米国台湾人関係者の支持と関心に感謝の意を表明し、記者会見を終えた。

今回の訪米では、米国側の丁寧な対応と台湾を重視する姿勢は、現役の国務副長官が次期大統領の有力候補とはいえ野党の代表と会見したことからも見て取れる。また、米国各地で華人団体を中心とした支持者との交流会では熱烈に歓迎されたことが各種報道から伺い知ることができ、今回の訪米が「順調」であり、総統選挙に向けた大きな関門をまた一つクリアしたことを感じさせられた外遊であった。